

Dream One 製作レポート その2

< Dream One Artist の巻 >

2010年12月28日

By Mr. Hippo

1. はじめに

前回のレポートでは、“Genius タイプ”として解像度最優先ではなく、心地良さを重視した音作りのシステムを紹介しました。第二弾の今回は“Artist タイプ”として、生の音楽のエネルギー感や躍動感、演奏現場の立体音場の再現を重視したシステムのレポートです。ちょっと異常なくらいのリアリティが出ますが、非常に鋭敏な再現性を持つため、アンプや配線材にも気を使う必要があります。才能は素晴らしいが扱いには注意が要するという事で、“Artist”と名付けました。

私としては、今回の Artist タイプの方が本命なのですが、Genius も Artist もそれぞれ説得力のある仕上がりになったと思います。両者を比べる事で、皆様の音作りの参考になれば幸いです。

今回も詳細な資料を添付しましたが、基本は Genius と同じなので、ネットワーク等の異なる部分のみの内容となっています。まずは Genius のレポートをご覧ください。



2. Dream One Artist の重点目標

解像度重視とは言っても、いわゆる“モニター”的な音が目的ではありません。私としては、「生の音楽の生き生きとした表情や感動感をありのままに再現したい」のです。その手段として、解像力や音像感、空間再現性、厚み感、エネルギー感、自然なバランスといった事柄の総体である「音離れの良さ」「軽さ感」を追求しています。

今回の Artist タイプの基本は前作の Genius タイプと同様ですが、更に下記の重点目標を追加しました。

・誰でも驚く程の仮想現実感がある事。

PARC 製品の音の軽さについては、ピンと来ない方が多いかもしれないと感じているのですが、結果として得られる異常なほどに鮮明で自然な仮想現実空間と音像定位には、オーディオに関心の無い方に説明抜きで聴かせてさえも、非常に驚かれた経験が複数あります。経験的には、仮想現実感に優れたシステムは、自然な音色感、解像力、軽さ感等あらゆる点で優れている総体の上に成り立っていると思っています。ですから例えば、椅子に座ってギターを弾いている演奏家の足元に、飲みかけのペットボトルが置いてあるのが見えるかのような鮮明な仮想現実感が得られるシステムは、基本的に優秀であると考えて間違いのないと思います。

3. 設計、部品選択、そして調整の苦労

前作との大きな違いは、ネットワークコンデンサーを全て Solen 製のフィルムに変更している点です。しかしそれだけでは済まないのがスピーカーシステムの難しいところです。前レポートでは完成状態での要素解説にとどめましたが、今回は各部分をどの様に変更したのか、泥臭い試行錯誤も含めてレポートする事にしました。皆様の音作りの参考になれば幸いです。

以下前作の Genius と異なる部分を中心に解説します。

・ネットワーク設計 (<1/4 ネットワーク回路図>参照)

Genius と同じく -12dB/oct スロープの 2.5kHz クロスですが、トゥイーターに 8.5kHz のディッピング回路を追加しました。解像度を高めるためにガチガチの処置を行くと、T111S 自身の高域のピークがどうしても煩いので対策する事にしました。

ディッピング回路の調整はじつに厄介です。ピークの減衰のみならず、その両脇の帯域にも影響してしまうので、強く効かせればくぐもった音になりますし、音像定位も不安定になります。反対に弱くすると効果がなくなってしまいます。また効かせ具合に応じてトゥイーターのレベルも変更し、バランスを取り直す必要もあります。

これらの調整は絶妙な妥協作業であり、f 特測定や回路シミュレーターで最適化するのとは不可能だと思います。耳と判断力の良い訓練にもなりますので、皆様もチャレンジなさってみては如何でしょうか。これにはひたすら根気が要ります。

・ネットワークコンデンサー (<4/4 部品表>参照)

全て Solen 製のフィルムコンデンサーです。価格がほどほどながら情報量が多く、くせも少ないので、使い易いコンデンサーだと思います。

・配線材 (<4/4 部品表>参照)

さすがに平行ビニールコードでは音が細くて限界を感じました。そこでカナレの 4S8 を使用しています。業務用に大量に使われており、価格が安いせいかオーディオ用コードとしては低く見られている様です。このコードは 30m くらい引き回して使ってもくせが出ず、使い易いコードです。厚み感が欲しいので、4S6 ではなく、太めの 4S8 の方を選択しています。

・吸音材（＜3/4 吸音材製作図＞参照）

Genius では、やや箱を鳴らしてゆったり感が出る様に、敢えて少なめの吸音処理にしていました。しかしコンデンサーを変更して情報量が増えると、例えばソプラノの二重唱などの強音で、音が割れるような響きが気になってしまいます。そこで定在波用吸音材を1巻追加する事にしました。この処置により余計な付帯音が減少し、空間再現力や音像の存在感が向上します。

・バスレフダクト再調整

吸音材の追加により低域が引き締まりましたので、ダクト調整が Genius と同じままでは低音不足になってしまいます。そこで、ダクト長を 7.5cm に変更してバランスを再調整しました。

・トゥイーターのレベル再調整

吸音処理の変更で中低域が引き締まりましたし、コンデンサーの変更でも高音域の音力が増えています。即ちこれらに合わせてトゥイーターのレベルの再調整が必要になります。ディッピング回路との兼ね合いを含めた結果、-1.1dB に落ち着きました。（結果としては Genius と同じ）

・下部室の防振砂

Genius タイプに変更を加えた訳ではないのですが、Artist タイプでは、この効果が大きいので必須重要事項と考え、改めて取り上げました。砂の充填に伴い、音像定位の滲みがなくなり、空間再現も良くなります。スパイク等の高価なアクセサリよりも断然効果的です。自作ならではの手法だと思います。



4. 製作について

製作の詳細については、Genius タイプの製作レポート、及び下記の別途資料をご参照下さい。

< 1/4 Artist ネットワーク回路図 >

< 2/4 Artist ネットワーク組立図 >

< 3/4 Artist 吸音材製作図 >

< 4/4 Artist 部品表 >



5. 試聴結果とまとめ

・使用システム

- ・ CD プレーヤー : 特注製作品
- ・ ラインアンプ : 管球式モノラル構成
- ・ パワーアンプ : 管球式モノラル構成、25W*2
- ・ プリメインアンプ : ONKYO Integra A-925 (参考確認のため)

・試聴結果

1. “Jazz at the Pawunshop” プロブリウス PRCD7778

Track 3-High life. 高品位録音でお馴染みのプロブリウスレーベルのジャズライブ録音です。音場感を重視した録音は、明らかにクラシック畑の録音エンジニアのセンスであって、実に「ジャズらしくない」録音であり、通常のシステムで聴くと熱気のない冴えない演奏に聞こえます。しかし、音が軽く、エネルギー感と空間再現性に優れる Dream One Artist では、目の前に熱気あふれるご機嫌なライブが再現されます。

2. “An Old Fashioned Christmas” ノンサッチ 7559-79053-2

Track 8-What child is this(Greensleeves)。CD 初期のアカペラのクリスマスアルバムです。ドライでややオンマイクな録音で、自分の部屋の中にコーラスグループを招き入れた様な感じになります。スピーカーの向こう 1m 位の中央にギター、2m 位奥の左右に分かれた男女のコーラスという定位になります。音像はまったく滲まず非常に明瞭で、まさにそこに人が並んで立っている感じです。特筆すべきは、ハモった時の分厚い肉声のエネルギー感が良く出る点です。この太くかつ軽くてエネルギーのある感じは F131PP+T111S の真骨頂だと思います。

3. “Cantate Domino” プロブリウス PRSACD 7762

Track 2-J.G.Walther オルガン協奏曲。Track 11-A.Adam クリスマスソング。言わずと知れた名録音のクリスマス曲集です。Track 2 のオルガン独奏では、前方の見上げる様な高い所にオルガンが定位し、頭の上から響きが降り注ぐ様に聞こえます。カテドラルのオルガンの圧倒的な存在感と心地良さは、是非一度生で体験してみてください。そしてこのシステムの空間再現力は超一級だと思います。Track 3 のコーラスは、中途半端な高解像度システムで聴くと結構煩い音になる場合がありますが、このシステムではビリビリする様なエネルギー感がありながら、まったく煩くありません。

4. “マーラー「復活」” ベルティエニ指揮 東芝 EMI TOCE-8305-6

DISC 2, Track 2-静かに流れる様な動きを持って。正面全体に大オーケストラとホール空間が心地良く広がります。冒頭のティンパニーも高い所から聞こえます。(大抵のコンサートホールではその様に聞こえます。見た目と実際に感じる音像定位は必ずしも一致しない事にご注意下さい。)

5. “シューマン曲集” ジャン・マルク・ルイサダ RCA BVCC-31042

この低背のフロア型スピーカーとは無関係に、目線よりもやや高い向こう側に鮮明な立体映像のごとく実物大のグランドピアノが現れます。タッチの強弱による音色の変化や、名匠によるグランドピアノ全体が共鳴する様な分厚いスケール感、存在感が素晴らしい。打鍵時のアタック音も軽く自然に楽々と出ます。

・まとめ

「異常な程の仮想現実空間」がちゃんと再現されます。軽く、太く、エネルギーのある音は、「小型の割には」とか「コストの割には」と言った修飾語とはもはや無縁の世界だと思えます。しかし正直に言えば、T111S が時々クセを出してしまうのが珠にキズです。そうは言ってもこれ以上の完璧さを求めるのは、いくらなんでも罰当たりだと思います。それでも自宅のディナウディオの現用システムには、もはや戻れないだけの魅力感溢れるシステムにまとまったと思えます。

By Mr. Hippo

補足事項 (このレポートを参考に製作された場合の注意点)

・音が細い、潤い感がない、聴き疲れがする場合

基本的な注意事項は、Genius のレポートの“補足事項”をご参考下さい。更に本器の場合は解像度が非常に高いので、アンプやプレーヤー等の“電気系”の問題点も曝け出してしまう。アンプの試聴レポートではないので、深入りは悪しからずご容赦いただきたいのですが、本器はハイエンド機器の良し悪しもはっきり出してしまうだけの能力を持っていますのでご注意ください。